JICA 教師研修　学習指導案・授業実践報告書

【実践者】

氏名	中村　俊佑	学校名	東京都立五日市高等学校
担当教科等	外国語（英語）	対象学年（人数）	１年 B 組（32 名）
実践年月日もしくは期間（時数）		2021 年 12 月 13 日（月）２限 10:00～10:40	

【実践概要】

1. **実践する教科・領域**：コミュニケーション英語 I

2. **単元(活動)名**：多文化共生時代を生きる私たちに必要なこと
～英語スローガンで世界とつながり、真のグローバルパーソンになる！～

3. **授業テーマ（タイトル）と単元目標**

授業テーマ：多文化共生のために必要な英語スローガンを作成しよう

単元目標：

(1) 身の回りの「多文化共生」に目を向け、英語学習のモチベーションを「外国語としての英語」から「国際語としての英語」にシフトさせ、英語を学ぶことが世界とつながることだということを意識できるようになる。

(2) グローバル化の進展により、国際的なヒトやモノのつながりがより顕著となってきている現代において、国際的な視野で身の回りの課題について自分ごとに捉え、行動できるような生徒を育てる。

(3) 様々な社会課題と英語の授業で学んだことを関連させ、教科横断的に学習することを通して、自己の在り方や生き方を考えながら、他者と協働して、持続可能な社会づくりに関する問題課題解決をできる生徒を育てる。

(4) これまでの英語授業で学んだ英文法や慣用表現、基本語彙を用いて、英語スローガンを作成し、多文化共生において必要なことについて簡単な英語で意見を表明することができる。

(5) SDGs の本質を捉え、世界全体が共通の課題解決に向けて自律的に取り組んでいくことが大切である。海外修学旅行に向けて、SDGs を他国との共通言語として協働して取り組んでいくための素地を養う。

関連する学習指導要領上の目標：

外国語（英語）の学習を通じて、外国語や外国語の文化のみならず、日本語や日本文化に対する理解が深められ、広い視野や国際感覚、国際協調の精神を備えた人材の育成につながることが期待される。また、コミュニケーションへの積極的な態度を養うことで、国際化が進展する現代において、異なる文化を持つ人々を理解し、自分を表現することを通して、異なる文化を持つ人々と協調して生きていく態度に発展していくものになる。

4. **単元の評価規準**	①知識及び技能	ア．不定詞の名詞的用法・目的用法と評価・判断を示す「It is＋形容詞 to do」の構文、意見を伝える「I think (that)～」を組み合わせて用いて、自分の意見を簡単に表明することができる。 イ．魅力的な英語スローガンを見て、効果的な表現方法の特徴を理解することができる。 ウ．聞き手により伝わりやすいように、原稿を読む姿勢ではなく、顔を上げ、なるべく聞き手に視線を向けて、大きな声でイントネーションや表情の工夫、ジェスチャーを加えながら発表をすることができる。
	②思考力、判断力、表現力等	ア．学んだ語彙や表現を用いて、効果的に相手に伝える英語スローガンを作成することができる。 イ．様々な語彙があるなかで、より相手に効果的に伝えるための語彙の選択をすることができる。 ウ．図表やグラフを的確に読み取り、課題が何であり（WHAT）、解決のための方策（HOW）を提示することができる。 エ．これまで学んだことや経験したことと関連させて、内容を推測したり、意見を持つことができる。
	③学びに向かう力、人間性等	ア．異文化に対する理解を深め、自分とは異なる背景を持つ他者と協働していこうとする態度がある。 イ．相手の背景や意見に耳を傾け、伝えたいことを把握したうえ

		で、自分の伝えたいことを伝えようとしている。 ウ. 理解できないことや苦手なことがあっても、他者の助けを求めたり、自分の貢献できる分野で協力をしようとする姿勢がある。

5. 単元設定の理由・単元の意義

（生徒観、教材観、指導観）

【単元設定の理由】

学科改編に伴って、本校では国際理解教育を推進していく「海外学校間交流推進校」に指定され、台湾での海外修学旅行、JICA 出前講座、SDGs ワークショップ、TGG（Tokyo Global Gateway：東京英語村）への参加、海外とのオンライン交流等の取り組みを行っている。SDGs についての認知度も比較的高く（入学時の調査で 42.5%が「知っている」と回答）、中学校で学んだ生徒も多い本校でも外国にルーツを持つ生徒が年々、増加している。今回は次年度に控えた海外修学旅行の事前学習としての位置づけで、多文化共生や世界と日本のつながりや共通の課題について、生徒が自らの目標設定を行う契機となるように設定した。生徒は作成した英語スローガンをもとに、海外修学旅行におけるテーマや交流目標を設定し、現地での調査や交流につなげる。

【単元の意義】

英語が苦手な生徒が多い学校だが、海外修学旅行では、自分なりの視点やテーマを持ち、簡単な英語表現等のストックを身につけた状態で参加して欲しいと考えている。「多文化共生」は外国語教育の高次の目標である。多文化を生きる状況で、異なるものにどう対応し、違いとどう向き合うかが大切である。これまでの英語教育では、その言語が使われる文化を学ぶことが重視されてきた。しかし、今後の多文化を生きる状況では、言語と文化の対応関係を想定することは難しく、英語という言語を 1 つの共通語として、異なる文化を背景とする者同士が使うのが実情となってくる。日本に居ながらにしても異文化状況に出くわす場面は増えてきているが、得てして「異文化」というと、ステレオタイプにつながり、偏見や分断の問題につながる。そこで、異文化という違いを越えて、「個の視点」（田中, 2017）を持って、他者と対峙することが重要である。違いがありながらも、個の視点を持って多様な人々と向き合い、創造的な協働をしていくことが大切であることに、今回の授業を通して生徒が少しでも気づくことができれば、世界的視野を持って活躍する生徒の育成の一助となるはずである。

【生徒観】

休み時間などは賑やかな生徒もいるが、クラス全体の雰囲気は、真面目でおとなしいという印象である。「言われたことはしっかりできる」生徒が多いが、自尊感情が低く、自ら何かを自分から行ったり、発言したりすることに臆してしまう場面が多く見られる。人間関係構築に課題のある生徒も多い。また、中学校時代、特別支援学級に属していた生徒も多く、学習面において困難を要し、個別支援を必要とする生徒も在籍している。

【指導観】

本校は英語に苦手意識を持つ生徒が多く在籍している。令和3年度入学生の入学時の調査（2021年4月に実施）では、「英語が大の苦手」と答えた生徒が44.9%、「どちらかといえば苦手」「苦手」を含めると、9割近くの生徒が該当すると答えている。つまり、中学校時代の英語の基礎が固まっていない状態で入学してくる生徒が大半であり、その学び直しを行いながら授業を展開している。英語学習のモチベーションも上がらない生徒が多いため、「なぜ英語を学ぶのか」「私たちの生活が実は海外とつながっている」といった身近な話題に言及しながら、英語を学ぶ意義を伝えている。

集中力が続かない生徒も多いことから、活動の場面を多く設け、教師による説明は最小限に留めている。ほぼ毎回の授業で、生徒同士で協働作業や音読練習を行う機会を数多く設けており、コミュニケーションを取る態度を養い、学びを深めていく作業を行っている。また、活動や発表の場面で、小さなことでも褒め、自尊感情を高めるようにし、「できた・わかった」という瞬間を増やし、成功体験を積み重ねる指導を行っている。

6. 単元計画（全３時間）

	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	多文化共生時代に生きる私たち	● 日本と世界の	【導入】 ① ラグビー日本代表の “One team”の写真を見て、気づくことをペアでシェアする。（特に、「人」に注	① PPT (p.1～2) ・Forms (iPad) ・ワークシート

	～日本と海外との人やモノのつながり・多文化共生社会に必要なスキルとは？～	ヒト・モノのつながりについて知り、「多文化共生」とは何かを考える。 (15 分) ● 多文化共生のためにどのような力（スキル）が必要なのかを考える。 ※ ④～⑥：15 分 ※ ⑧：10 分 ● 多文化共生のために世界共通言語である英語を用いて、お互いの目標となる魅力的なスローガンを他者と協働して考える。	目するように声をかける）Forms にも投稿させて、全体でもシェアする。globalization の時代であることにも言及し、人とモノが盛んに移動する時代であることを伝える。 ② 「移民大国世界第 4 位」の画像を見せ、どこの国かを考えさせる。その後、統計資料を見せ、日本を訪れる外国人が年々増加していることを確認させる。また、東京は在留外国人が他道府県と比べて最も多いことを言及する。 ③ 本日の授業のキーワード “live together” “multi-culturalism” “diversity” の意味を生徒に発問して応答させながら、導入する。 【展開】 ④ 生徒の身の回りの外国にルーツのある人との関わりのなかで、感じたことを思い出して書かせる。ペアでシェアし、Forms でも全体シェアする。 ⑤ 埼玉県川口市の芝園団地について紹介する。 ⑥ 芝園団地で課題となっていた事例について読み、(a) 課題は何であるか(WHAT) (b) 課題を解決するために何が大切か(HOW)を考えさせる。 ⑦ ⑥で考えたことをペアで共有する。また、Forms で投稿し、全体で共有する。※時間がない場合は、個人で留めておき、ディスカッションの際に、意識するように声をかける。 ⑧ ディスカッショントピック「多文化共生のために、どんな態度が必要か」について意見を出し合う。(a) 個人でワークシートに書き出す (b) グループになり、A3 版 1 枚にマインドマップの形で個々人が考えたことを出し合い、アイディアを書き出す。(c) その後、共通する大事なキーワードは 1 つにまとめる。 ※ 5～6 人 1 グループとなり、グループ作業の前に役割分担を決める（班長（司会）・資料まとめ・イラスト・発表・英語翻訳）➡その後、班長の司会のもと、アイディアを出し合って作業を進める。 ⑨ 「多文化共生のために必要な態度」で英語スローガンを作成することを伝える。有名なスローガンなどについていくつか紹介し、魅力的なスローガンのポイントを説明する。 【まとめ】 ⑩ グループで英語スローガンを作成する。次回、発表を行うことを伝える。	② PPT (p.3～6) ③ PPT (p.7)・ワークシート ④ PPT(p.8)・Forms(iPad) ⑤ PPT(p.9) ⑥ PPT(p.10～11)・ワークシート ⑦ Forms・ワークシート ⑧ ワークシート・PPT(p.12～14)・A3 版用紙・色ペンなど ⑨ PPT(p.15～25) ⑩MEW Core500(英単語補助教材)・iPad・教科書等
2 本時	多文化共生時代に必要な指針を英語スローガンにする	● 多文化共生のために必要なことを話し合い、英語スローガンにして、英語で意見を発表する	① 前回の復習 ② ALT, JET の先生の異文化体験、マイスローガンを英語で聞き取る。 ③ グループで英語スローガンを作る。 ④ 英語でスローガンを発表する。 ⑤ 授業の振り返り ※ 詳細は、「本時の展開」に詳述。	・PPT ・ワークシート ・A3 用紙・色ペン ・Forms ・Classi ・iPad ・MEW Core

3	多文化共生社会を生きるには？（まとめ）	● 多文化共生社会に生きてきた人の話を聞き、多文化共生に必要な姿勢を考える。	① スローガンのまとめを行い、投票結果を提示する。 ② ワークシートの記入を行う。 ③ ALT（フィリピン出身・日本在住歴 20 年）と JET（アメリカ出身・日本在住 1 カ月）の日本での異文化経験を聞き、そのうえでの「多文化共生に必要なスローガン」を発表してもらう。 ※コマ数の関係で 3 時間目まで行えないクラスもあった。	① Classi ②・③ ワークシート ③ 発表資料（A3 用紙）

7. 本時の展開（２時間目）

本時のねらい：

① 多文化共生のために必要な異文化理解や異質な他者と協働する姿勢、多様性を認め合う態度に気づき、日本と世界の**つながり**を自分事化して、対立と分断を乗り越え、自律的に行動できるようになる。

② 日本で生活する異なる文化背景を持った人の意見を聞き、違いを乗り越えるために必要なことは何かを考える。

③ 多文化を生きる上で、共通語としての英語を用いて異なる文化背景を持つ人がやりとりをするという実情を踏まえ、多文化を生きる状況で指針としたい「英語スローガン」を作る。

④ 他者との協働作業を通して、自己表現力や対話力を高め、自分だけでは得られなかった視座を獲得し、新しいアイディアの創出が可能になることを体得する。

⑤ 2 学期の英語授業で学んだ基本語彙、文法表現、意見を述べる際の基本的な慣用表現を用いて、自分の意見を簡単な英語で表明することができる。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動 ・指導形態	指導上の留意点 （支援）	資料（教材）
導入 （10分） 10:00～10:10	※身だしなみ・忘れ物確認 ① 前回の授業のテーマ・学んだこと等をペアでシェアする。 “What did you learn in the last class?” と発問する。（1 分） ② ①で話し合ったことを全体でシェアする。何人かの生徒に指名して答えさせる。 ③ そのうえで、前回のスライドを見せて復習し、キーワードである multiculturalism, living together, diversity の意味を確認し、授業の目的を共有する。	①ペアでの話し合いが円滑に進むよう、机間巡視をする。思い出せない生徒には前回のプリントを見直すように促す。 ②・③ 生徒の答えを板書する。答えた生徒には拍手をして、勇気づける。	① PPT 資料（p.13）・授業プリント ③ PPT 資料（p.14）
展開 （30分） (1)10:10～10:25 (④～⑤)	④ 相手に伝わり、行動の変容を促すようなスローガンの魅力的な例を振り返る。 ⑤ 発表の形式である To live in multiculturalism, we think it is necessary to (　　).So, our slogan is (　　).の意味の確認と発音練習を行う。 ⑥ グループになり、英語スローガンの作成の続きを行う。スローガンができた班は、発表者を決め、To live in multiculturalism, we think it is necessary to (　　).So, our slogan is (　　). の形で発表できるように、ALT, JET の先生のチェックをもらう。時間が余っていたら、ロゴ等のイラストも作るように促す。「スローガンに込めた思い」は日本語でも可。説明する際には、フォーマットに	④ 前回も見せたので、簡単なコメントで済ませる。 ⑤ JET に発音してもらい、リピートさせる。1 学期に学んだ不定詞の使い方について言及する。 ⑥ グループ内で役割分担（班長・まとめ・イラスト・発表・英語翻訳）を決めて、全員が参加できるように工夫する。分からない英語表現は iPad や MEW 等で調べさせる。ALT, JET の先生とともに机間巡視し、	④ PPT 資料（p.18～24） ⑤ マインドマップ用紙(A3)・スローガン発表用紙（A3）・色ペン・iPad・辞書・MEW Core500 など ⑥ A3 用紙・PPT（p.36）・タイマー

	従って英語で行う。 Our slogan：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ スローガンに込めた思い： ロゴマーク	作成の手助けを行う。できたものは、JET や ALT の先生に見てもらい、表現の確認をさせる。発表資料にはロゴなどを付けて視覚的な工夫も加えるようにさせる。時間が余っていたら、ワークシート裏の Task 欄に記入させる。	
(2)10:25 ～10:35 (⑥~⑧)	⑦ スローガンができたら、各班の発表者（2 名でも良い）が A3 用紙のスローガンを持って各班に行き、英語で発表する。1 分で発表をさせ、聞いている生徒は、ワークシート裏の Summary に記入する（各班の番号に対応する形で記入する。	⑦ 発表者の発表順は PPT で提示する。時計回りに生徒が回り、発表者は 6 回立って発表する。原稿にばかり目を向けず、聞き手の表情を見ながら発表するように気をつけさせる。 ※時間内にスローガンが終わらなかった班は話し合った内容をシェアすることも可能とする。	⑦ A3 発表用紙・授業プリント
	⑧ JET、ALT の先生に良かったスローガンについてコメントをもらう。また、JET・ALT の先生のマイスローガンも発表してもらう。また、自分たちのスローガンの変えた方が良いと思った点についてシェアし、場合によっては、改訂を加える。	⑧生徒はプリントに記入する。内容を理解できなかった人は聞き取れたキーワードだけでも記入するように働きかける。生徒の理解度に応じて、日本語でミニ解説を行う。	⑧授業プリント
まとめ （5 分）	⑨ Classi の「授業アンケート」で授業の振り返りを行う。自分が取り組みたいと思ったスローガンに投票を行う。 ～Classi のアンケート設問～ (1) あなたが最も共感したスローガンを書いた班を選びなさい。 (2) 本日の授業で学んだことを書きなさい。 (3) 多文化共生のためにあなたが実行する行動（マイアクション）を書きなさい。	⑨iPad を出させて、取り組ませる。どうしてもない生徒は、申し出をさせ、スマホで代用させる。机間巡視して取り組み状況を確認して、必要に応じて、声をかける。 Classi アンケートの結果は、時間が余れば、全体に共有する。	⑨ iPad

8. 評価規準に基づく本時の評価方法

①知識及び技能：

ア．発問への応答、ワークシートへの記入、発表内容

イ．発問への応答、ペアでの取り組みの様子

ウ．発表練習や発表の様子（声・イントネーション・表情・姿勢・ジェスチャー等）、グループでの取り組みの様子
②思考力、判断力、表現力等：
ア．グループワークでの取り組みの様子、ワークシートへの記入
イ．調べ学習の様子
ウ．ペアやグループワークでの取り組みの様子、ワークシートへの記入、発表内容
エ．発問への応答、発表内容
③学びに向かう力、人間性等
ア．グループワークへの積極的な取り組みの姿勢
イ．相手の意見に傾聴しているかをペア・グループでの取り組みを見て評価
ウ．グループワークの途中で諦めたりせず、協力しようとする姿勢があるかを見て評価

9. 学習方法及び外部との連携

(1) SDGs に関する意識調査（4 月当初・Classi で実施）

(2) SDGs ワークショップ（7 月・新渡戸文化学園 山藤旅聞教諭）
SDGs の考え方について知り、行動に起こすことを目的に山藤先生にチョコレートを用いたワークショップを実施して頂いた。私たちが普段消費しているパーム油が熱帯雨林破壊という大きな環境問題につながってしまっていること等を伝えて頂いた。講演後、生徒も自分の消費を見直したり、自ら行動に移してみようという意識となった生徒が増えた。

(3) 地域の魅力や課題を知るためのワークショップ（7 月・JTB との連携授業）
動画を作る際に必要な視点や SDGs の視点で地域を見直すための JTB と連携してワークショップを行った。

(4) 地域の魅力動画の作成（進行中、JTB との連携・あきる野市・檜原町・日の出町と連携）
地域の魅力を 3 分の動画にまとめ、発表できるようにする。海外修学旅行の事前学習の位置づけ。SDGs の考え方を念頭に置くことは意識させるが、内容は自由。探究発表会や台湾との交流の際にも利用する。良いものがあれば、地域活性化のために地域でも使用していただく。優秀なチームは来年度の「観光甲子園」に出場する。

(5) 和綿の種ひろがるプロジェクト（ESS 国際交流部で進行中、他校との連携ワークショップ実施：メイドインアース前田剛さん）
エシカル消費、オーガニックコットン（和綿）栽培、世界のコットン栽培の現状を知り、SDGs の視点で課題を見直す。Twitter, Instagram 等で栽培日記を公開。文化祭でも生徒自作の栽培日記を公開。収穫した和綿も披露。和綿は、メイドインアースに送り、今後、T シャツにしていく。

(6) 台湾とのオンライン交流会（12 月 8 日に実施、3 月にも実施予定・JTB）
お互いの国の紹介、学校紹介、日本と台湾の学校生活、それぞれの視点から見た相手国の魅力、自国の魅力と有名スポット、高校生で流行っているもの等について Teams を利用したオンライン交流を行った。3 月は実際に本授業で作成した「多文化共生のためのスローガン」を共有し合って、課題解決のためのアクションにつなげていく。

10. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

(1) JICA エッセイコンテストへの 1 学年全員参加（8 月）
SDGs を自分事化し、世界と日本のつながりを知り、自分の経験に即して、私たちの地球のために自分が行動できることを考えて文章化した。

(2) 文化祭での修学旅行事前学習展示（10 月）
1 学年全員に夏休みの宿題で課した、SDG と関連のある写真を撮ってきたものを集めた「SDGs フォトコンテスト」を掲示。また、海外修学旅行に向けて、SDGs の意識調査や海外のイメージなどの調査結果を掲示の形でまとめた。

(3) 地域新聞「まちづくり通信」での生徒作成記事の掲載
地域での清掃活動、地域在住外国人との交流等を地域住民と連携して実施。ESS 国際交流部生徒が記事を執筆した。

(4) 学年英語コンテストの開催
1～2 学年では、ALT や JET と連携した英語の発信型授業を実施。学年末の 3 月に成果発表会として「英語劇」「英語スピーチ」のコンテストを実施予定。大学教授等を招聘して審査やミニ講座を行ってもらう。

(5) JICA 出前講座の実施

海外と日本のつながりを知るために、青年海外協力隊 OB や長期滞在研修員に体験型のワークショップを行ってもらう。

(6) 海外とのオンライン交流

これまでアメリカ、台湾とのオンライン交流を実施してきた。今後は、ザンビアや南米等の日本とつながりがある国との相互交流を通して、多文化共生に関する理解を深めていく。

(7) 地域発信音楽プロジェクト

地域在住のミュージシャンと連携して、ESS 国際交流部が地域の魅力・環境問題の大切さを伝える歌詞を作曲・作詞し、現在は英訳を行い、世界へ発信する予定である。

【自己評価】

11. 苦労した点

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で 9 月はほぼオンラインでの授業対応となり、授業進度に大きな遅れが出た。その後も分散登校等のため、通常通りの授業展開が行えず、授業計画は見通しが立てにくい状況が続いた。本来、通常授業のカリキュラムのなかで国際理解教育のエッセンスをどう入れていくかが課題であったが、やむを得ず、今回のように、期末後の特別時間割での実施となった。また、学校再開のなかで、業務過多の状況が続き、授業準備に十分に時間が割けない事態となった。国内研修では多文化共生、防災、国際理解、人間の安全保障、SDGs など多様な視点からの学びがあり、生徒には様々なことを伝えたいという想いがあり、題材の選定に苦労した。授業実践にあたっては、多くの情報を盛り込み過ぎては、生徒にとっては学びの成果が上がらないと考え、「多文化共生」に絞って題材を選定することとした。もう 1 点苦労したのは、「英語科との関連性」である。英語科という教科の特性とどう結びつけて授業を展開していくかに頭を悩ませた。台湾への海外修学旅行を見据えた時、お互いの共通言語は英語であることから、英語を用いて、多文化共生のための課題解決のためのスローガンがあると良いのではと考え、今回の授業展開となった。

12. 改善点

【授業前の指導案の検討】

一般社団法人　教育環境デザイン研究所 CoREF プロジェクト推進部門研究員　畑　文子先生より貴重なご意見を頂き、主に以下の点を改善した。

①生徒が活動しやすいように ALT、JET がスローガンを作成し、それを生徒の活動前に披露してもらおうと考えたが、生徒の自由な発想を妨げてしまう可能性があるので、活動後に回した

②「多文化共生に必要なことは何か」という指示では、指示が曖昧でわかりにくいため、「多文化共生に必要な態度（姿勢）は何か」という指示に変えた。

③スローガンの発表の後、相互評価をするとともに、自分たちのスローガンを見直し、さらに改訂する時間も作る。

④芝園団地のエピソードを読ませるアクティビティーで、ネガティブな情報のみで終わってしまっているので、最後に「…そこで古くから住んでいた住民たちは知恵を絞った…」の一文を加え、生徒がより考えやすいように工夫した。

【授業後の研究協議】

・発表者が毎回同じ人にならないようにすることと、発表者は他の班の発表を聞けないという弱点があるので配慮が必要である。

・グループは 6 人だと少し多いように感じた。4 人くらいが適切なグループサイズだと感じた。

・最初から英語翻訳を使ってしまうのは少し残念。やはり、英語スローガンを作成するのは、英語が苦手な生徒が多い中ではなかなか難しかった。学んだ基本語をいかに使用して、独創的なアイディア・言葉の創出

につなげていくかは課題である。
・スローガン作成を通して伝えたいことをどう伝えるかという意識が育まれると感じた。
・内容的には盛り込み過ぎで、もう少し時間を十分にとった方が良かった。ロゴ作成・発表資料作成まで十分に時間がなかった班もあった。

13. 成果が出た点

・発表者が各班を回り、ミニプレゼンを 6 回繰り返すことで、発表者は表現を覚えたり、回を重ねるごとに説明がうまくなっていった。全体の前ではハードルが高い発表もこうして敷居を低くしてから実施すると良いと感じた。このステップを踏んだ後、生徒に自信を持たせ、良かった人を全体の前で発表させても良いと感じた。
・グループ内での役割分担を明確化することにより、英語が苦手な生徒もロゴイラスト作成で貢献する等、多くの生徒が参加できる仕組みが整った。

14. 学びの軌跡（生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）

※囲みは生徒のコメントをできるだけそのままの形で抜粋している。

【授業前】「多文化共生」に関する事前学習として、授業前に生徒にアンケートを取った。この段階では「多文化共生」の中身については生徒には言及していない。テキストマイニングして、動詞・名詞で分析した。

(1) 「多文化共生」とは何か？この言葉からイメージすることは？
・動詞：「生きる」「暮らす」「触れ合う」「認める」「取り入れる」「異なる」「違う」「合う」
・名詞：「文化」「理解」「様々」「色々」「共有」「生活」

(2) 「多文化共生」で必要なことは何か？
・動詞：「知る」「認める」「関わる」「伝える」「受け入れる」「分かる」「思う」「気づく」「合う」
・名詞：「文化」「お互い」「差別」「理解」「相手」「尊重」「必要」「一人一人」「心」

【授業後】

(1) 生徒作成の英語スローガン

生徒が作成した「多文化共生のための英語スローガン」は以下の通りである。英語ではあったが、発想がクラスごと・グループごとに多様性が出たのは興味深い。以下に、生徒のスローガンを分類してみた。「共生」のためには、言葉だけではなく、「笑顔や態度」といった社会的・情動的知性（SEI）が大切であることに気づいた生徒が多かった。

◆「理解、思いやり」：Understand each other. ／Understand the world.
◆「思いやり、尊重」：Take good care of each other. ／Respect each other. ／
Respect the other people.／Let's respect each other. ／Let's get rid of discrimination.
◆「文化」：All kinds of National culture assimilate. ／Know each others' culture and then enjoy!
Accept the culture of another country.
◆「共生、協力」：Together with. ／Find cooperation. ／Let's create our new era.
◆「コミュニケーション」：Open your mind with each other. ／Talk in English.
◆「笑顔、心」：Let's unite our hearts.／Be cheerful and smile.／
Know each other, smile around each other.

生徒の発表の後、JET・ALT の先生にも自らの異文化体験を伝えてもらうとともに、多文化共生のためのスローガンを作成し、披露してもらった。
・JET の先生作成：Life together, live it better.

・ALT の先生作成：Human color doesn't matter, human feelings do matter.

(2) 授業で学んだこと

授業で学んだことを生徒のコメントとともにに、キーワードごとにまとめて紹介する。

ア）多文化共生・異文化理解への姿勢について

「違いを認め合う」「理解し、受け入れる」等の能動的なコメントが多かった。

・共存への想い　・他文化への理解　・共感できるやつがあった
・優しい心を持つことが大事なんだと思いました
・外国人との共生をだいじにする・日本には移民が多く居ること　・世界で助け合うのは大事
・どの国の人とでも協力して生きること。・外国人と助け合いながら過ごすこと
・色々な異文化があるということを知った・多文化共生や異文化理解を深めようと思った
・多文化を生きるために必要な態度について・多文化にふれることは大事なことだと実感した。
・世界にはいろいろな文化があり、色々な違いを認め合うことが大切だと思った
・他国との文化の違いを知った　・分かりあうことの大切さ・多様性の大切さ
・異文化を知ることは大切だと思った・多文化共生は難しいが相手を尊重する事が大事
・他の国を尊重すること・多文化共生はこれから先重要な問題だなと思った
・お互いの文化を尊重して、理解することが大切だとおもった。
・理解し、受け入れることの大切さ・外国の人との関わり方　・考えること

イ）英語スローガンの作成やグループ作業での他者との協働について

他者と協働することで、様々な意見があることや、自分では気づかなかった新たな視点を得られるということに気づいた生徒が多かった。

・話し合いの大切さ・グループでの活動では、話し合いが大切だということ
・グループで協力して話し合いができてよかった
・いろいろな意見があったからこういうのもあるのかって気付かされた。
・スローガンを分かりやすくする　・スローガンの思いを考えた・英語のスローガンの作り方
・スローガンを英語で作ったのは初めてなので新鮮でした！
・それぞれの班で考えたスローガンや思いもわかった・多文化共生について、いろんな班の考えを知れた。
・協力すること　・コミュニケーション　・団結力・いろんな意見があった。
・外国人との交流の中での大切なことが意見としてたくさん出ていたので改めて学ぶことができました。

ウ）情動的なマインドで異文化とつながる

グローバル的な社会を生き抜くために必要なことは「笑顔」や「心」であることに気づいた生徒も多かった。言葉以上に笑顔は世界共通言語であるという視点は異文化交流の重要となってくるだろう。

・Smile は世界共通　・笑顔は大切。・日本人のおもてなしの心を大切に
・固く考えるのでは無くもっと広い心を持つ事の大切さを学んだ

エ）語学学習の大切さ

生徒には、台湾との交流の際に、台湾は中国語、日本は日本語という状況においては、コミュニケーションの手段は世界共通語である英語を使うということを伝えた。今回のスローガン作成も英語で行うことで、多

文化状況の中で創造的な協働を行う手段として重要となることを伝えた。生徒のコメントにもそうしたことに言及したものも多かった。英語が苦手な生徒にいかに英語学習のモチベーションを持たせるかということについても、研究協議では議論になったが、「英語を使うことで何ができるようになるのか」という視点で、英語学習の動機付けを高めていくようにしたい。

・英語を使うことで海外と交流することができるということ。
・英語を学ぶことで他の国のことの特徴などを知ることができる。
・英語は大切だと思いました。・色んな単語を知った
・多くのアイディアが多くて知らない英語も学ぶことができた。

オ）差別や偏見

文化規範を持ち出すと、「〇〇人は～だから」となってしまい、対話が断絶してしまう。しかし、対話を重ね、「受け入れる・理解しようとする」という能動的な関わりを行うことで、こうした負のイメージや衝突を回避できるのではないかと改めて感じた。

・偏った知識や偏見は宜しくない　・差別しない　・差別良くないことだと改めて理解できました

(3) 多文化共生のためにあなたが行うマイアクションは？

事前学習と比べて、生徒にとっての多文化共生のためのアクションの選択肢が増えた。

ア）能動的に多文化と関わる

多文化と接したとき、「理解する」「知る」「受け入れる」「調べる」といった能動的なアクションを起こそうというコメントが多かった。偏見や差別は知らなかったり、思い込んでしまったりすることで生まれてしまうものである。生徒のこうした能動的な気づきを大切に、対話的な状況を自ら作り出し、積極的に他者を理解し、行動できる生徒を育てていきたい。「身近なところからできることからやる」というコメントもあった。身近なことから始めるのが国際理解教育の出発点である。

色々な人と話す、思いやりを持って接する、相手・異文化を知る、相手の国の文化を知る、分かち合い、他国の文化を受け入れる・挨拶する（身近なところから）、色々な国について調べたり、SNS 等で話したりしてみる、お互いの国の文化を知る、困ってる外国人がいたら助ける、相手の出身国の文化を調べて、良いところを知っていこうと思う、他の国の文化を否定せず、受け入れる、話しかけられたり、困ってたりしたらちゃんと通じなくても会話をする、互いの文化を認め合う、外国人の考えも大切にする、一人一人の個性を認める、お互いに理解し合うために相手の気持ちを知ろうとする、異文化を理解しその文化に応じた態度や姿勢をする、お互いを理解すること、海外の沢山の方と交流する

イ）情動的に他者とつながる

相手を思いやる気持ち、笑顔、心は国や文化を超えるものであることに気づいた生徒が多かった。こうした気持ちを大切にして、国際交流を深化させていきたい。

スマイル、笑顔を絶やさない、笑顔と表情、思いやりを持つ、助け合う、相手を思いやる、多文化を尊重する、優しくする、仲良くする、気配りをすること、協力する、協調、お互いに心の広い人になりたい。

ウ）ステレオタオイプ・偏見を持たないこと

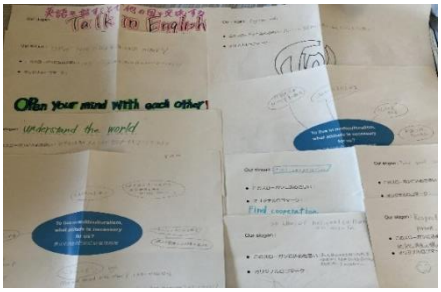
外（国）人の人を誹謗中傷しない、偏見を持たない、嫌悪感を抱かない、尊重、偏見をなくす、変な差別や行動を取らない、偏見差別を無くし分かり合う、差別をしない、行動や言動には気をつけて行きたい

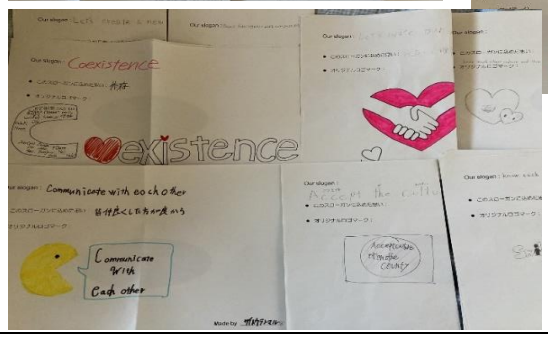
エ）英語学習を積極的に行うこと

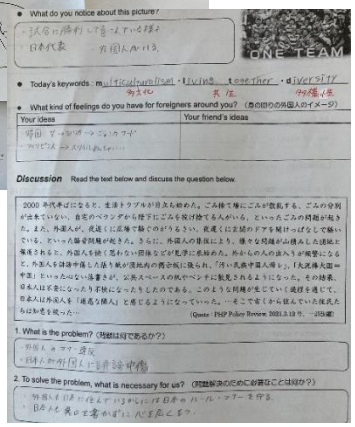
海外にルーツを持つ生徒も増えてきているが、英語が苦手である生徒は多い。英語を学ぶことが身近な異文化とつながるきっかけにもなることを生徒が認識できると英語を「自分ごと」にできるのではないか。

単語を覚える、英語覚える、英語を日常生活に取り入れる。英語を学ぶ
従兄弟がアメリカ人なので僕は誰よりも早く英語を理解することだと思う

～授業での取り組みの様子・～作成したスローガン・マインドマップ・ワークシート等～







15. 授業者による自由記述

・「移民大国 4 位」であるというのは生徒にとっても意外であるようだった。「アメリカ」「イタリア」「中国」等は挙がったが、日本が挙げられることはほとんどなかった。実際の現実と意識の差が何によって生じているのかが今後の研究課題である。

・今後の展望：作成した多文化共生のためのスローガンを集め、学年全体に共有する。個々人がそのスローガンを選び、課題意識を持って、そのスローガンを実現するためのマイアクションを策定し、実際にアクションを起こしてミニプレゼンテーションを作成する。3 月の台湾とのオンライン交流の際には、台湾側にも「多文化共生のためのスローガン」を作成してもらい、修学旅行のテーマを決める。実際の台湾修学旅行の際には、「多文化×SDGs」のテーマで、ミニプレゼンテーションを、ポスターセッションの形で行うことを企画している。

参考文献・引用文献:

文部科学省（2010）.『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』

佐藤芳明・いいずな語彙力習得支援プロジェクト（編著）(2013).『世界にはばたくための新・英単語学習システム MEW Exercise Book Core 500』いいずな書店.

赤松美知子・若松大祐（2016）.『台湾を知るための 60 章』明石書店.

森本俊・佐藤芳明（編著）(2017).『多文化共生時代の英語教育』いいずな書店.

佐藤真久（監修）(2019).『未来の授業 SDGs 探究 BOOK』宣伝会議.

佐藤真久（監修）・たかまつなな（著）(2020).『お笑い芸人と学ぶ 13 歳からの SDGs』くもん出版.

独立行政法人 国際協力機構 東京センターJICA (2020).『教師海外研修 代替国内研修 報告書』

佐藤真久・広石拓司(2020).『SDGs 人材からソーシャルプロジェクトの担い手へ』みくに出版.

田中茂範・阿部一(2021).『確かな英語の力を育てる 英語教育のエッセンシャルズ』くろしお出版.

岡崎広樹（2021).「隣近所の多文化共生」の課題―芝園団地の実態と実践から― 『PHP Policy Review Vol.15-No.80』PHP 研究所.

JICA 地球ひろば 『生きる力を育む 国際理解教育実践集』
https://www.jica.go.jp/hiroba/program/practice/education/materials/jhqv8b000005wd9w-att/materials_all.pdf

『つながる世界と日本 ホントは身近な途上国と私たちの暮らし』
https://www.jica.go.jp/publication/pamph/others/ku57pq00002navl2-att/find_the_link.pdf

開発教育協会 DEAR HP http://www.dear.or.jp/book/

ハンガー・フリー・ワールド HP https://www.hungerfree.net/whatyoucan/study/

外務省（2020).『日本とアフリカ』https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000087153.pdf

国際交流基金 HP https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/